

# 戦争の記憶

## 放送大学の平和学習 「戦争体験の伝承」

第2次世界大戦終了後75年が経ちました。今、私達は平和を享受していますが、その背景には悲惨な戦争がありました。二度と戦争を起こさないために、平和の為に、もっと戦争を知り、学ぶことが大切であると考えます。私達、放送大学の学生・卒業生の中には戦争時の記憶がある方がかなりおり、また戦後の困窮を体験したことから、それぞれの戦中・戦後の体験を伝えることが大切であると考えている方が少なくありません。また、終戦時、まだ生まれていなかった方でも両親、親類、あるいは知人などから辛かった戦争体験を聞かされてきた方も多くいるのではないのでしょうか。これらの直接・間接の戦争体験はとても貴重なものであり、これらの体験を通して学ばなければならぬことは多いのです。そこで、神奈川同窓会の皆様に大切な体験・記憶を提供して頂くべく、呼びかけたところ、このように沢山の方々が応じて下さいました。戦後の困窮を含む戦争体験を知り、学ぶことによって、放送大学だからこそ出来る平和学習から、若い方々に何かを学び、考えて頂く、そのための問題提起が出来れば、と願います。

最近の私達日本人はいわば“平和ボケ”していて、若い人達の中には戦争があったことさえ知らない人がいるという時代になっています。少し分量が多くてこれらを全部読み通すのは大変なことと思われませんが、特に戦争を知らない若い世代の方々はここに記された戦争体験、あるいは親の世代から聞いた話を全部読んで下さい。お願いします。そして何かを考え、学んで下さい。

(石橋正彦)

.....

### 佐葉慎二

私は3歳直前で終戦(敗戦)を迎えました。岡山の山奥に住んでいましたので、戦争の直接の被害はありませんでした。しかし上空をB29が飛行する中、夜中に母親に連れられてトイレ行く時に、カンテラの明かりが漏れないように布でカバーしていたことや、近所に軍隊が駐在していて、食料にするために銃剣に蛇を付き刺して行進していたことをかすかに覚えています。もっともこの恐ろしい話は、後で姉や兄の経験を聞いて自分の体験にしたのかもしれませんが。

日本は明治・大正・昭和と大きな戦争をしてきました。また明治以前の徳川時代の前までは戦争は絶えませんでした。日曜日の大河ドラマでも多くは戦争の物語です。ドラマでは英雄の華々しい活躍を描いていますが、実際に武器を持って戦場に駆り出された庶民の苦しみが忘れられがちです。その意味で戦後75年、日本が直接の戦争に巻き込まれなかったことは希有のことです。我々にはこの平和を大切に守る務めがあります。

現在のコロナ禍は平和ボケしている我々に、あらためて平穏な日常の大切さを再認識させています。コロナに負けず、コロナとともに生きていく新常态を一日も早く確立したいものです。

**高橋 昭善** 「戦争の記憶 ーできるだけ客観的にー」

- ・当時；逗子国民学校 2・3 年生？
- ・仲間数人で下校途中（午後）、米グラマンに機銃掃射を受けました。幸い草むらに飛び込み、難を逃れました。（怖かったですよ）
- ・それは、昭和 20 年 7 月 18 日、千葉県房総沖の艦載機が横須賀、猿島襲撃後、逗子、葉山を空襲した時のこと。（逗子市図書館資料）
- ・東京大空襲、昭和 20 年 3 月 10 日、夜、B29 編隊が相模湾沖から東京に向けて飛んでいきました。
- ・横浜大空襲、昭和 20 年 5 月 29 日、朝の 9 時 B29 編隊が相模湾沖から横浜に向けて飛んでいきました。
- ・藤沢、平塚、小田原空襲などなど、真っ赤に夜空を焦がしました。
- ・防空壕掘りの手伝い。（学校の、地域の）。
- ・灯火管制（日々の）などなど。  
子供ながらに 皆、覚えています。
- ・勤務校だった、横浜市立小学校（南区）の、何人もの高等科児童が、その横浜大空襲で亡くなっています。 去る 5 月 29 日、東京では、ブルーインパルスが飛び、皆さん楽しんでいましたが、当日は横浜大空襲 75 年目に当たることとして、 私はインパルスを宣伝していた NHK 横浜放送局に、抗議の電話を入れました。林市長や菅官房長官は横浜出身ではありませんから、あまり気にならないのでしょうかね。

なお、叔父は海軍で、レイテ島戦？で戦死、母の実家（中区大和町）はその空襲で焼け落ちてしまいました。

.....

**服部高重** 「傘寿雑感」

- ① 生地は大阪市住吉区帝塚山、家族構成は父母に子供 4 人を加えた 6 人。父はデパートの松坂屋大阪支店勤務。幼少の頃、他人から「坊や大きくなったら何になるの？」と聞かれ「ハイ、兵隊さんになります」と答えると「偉い！良い子だ」と頭を撫ぜられた。5 才位で、父の東京転勤に伴い杉並区高円寺に転居した。
- ② 東京では段々と戦争が激しくなり、夜 B29 が飛来するとサーチライトで銀色に機影が鮮明に見えるが、我軍の高射砲は遥か下で爆発して敵機には届かなかった。益々空襲が激しくなり、新潟県西頸城郡大和川村（現在は糸魚川市に併合済）に疎開した。終戦後、父は新しい事業を始めるため帰京したが、母と子供達は村に残った。東京では食料事情が著しく悪化していた為である。大和川村は半農半漁の寒村であるが食料事情は極めて良く、私達は毎日米と新鮮な魚を食べていた。私は昭和 21 年 4 月に大和川小学校に入学し、4 年生の 4 月に帰京し、杉四に転入した。私達昭和 14 年生まれは疎開の関係で、6 年間同じ小学校に通った生徒は少なかったのではないだろうか？
- ③ 帰京後、夕食は毎晩うどんに変わった。杉四では、アメリカから支給された粉ミルクの給食が出た。教室で机を並べた近藤節子さんが「このミルクはとてもマズイので、こうして飲むのです」

と、片方の手で鼻をつまみ、残りの手でコップを持って飲む方法を教えてくれた。

- ④ 私の高中時代は三年間B組で、担任の遠藤精一先生の薫陶を受けた。部活も先生担当の理科部とテニス部であった。久我山の先生のお宅に遊びに行ったら、目の青いメダカを飼っておられ、机上には「遺伝」と云う雑誌が置いてあった。先生のご専門は生物学で、遺伝の研究を続けておられたのである。英語部の担当は佐藤仁先生で、3年生秋の学芸会の英語劇でシェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」第3幕第2場「広場」の一部を原文のまま演じた。この場面は、シーザーを誅したブルータスの演説(約300語)と故シーザーを援護するアントニーの演説(約1000語)から構成されている。ブルータス役を庄司元昌君、アントニー役を私が演じた。当時、英語の勉強は中学になってからだったが、学習開始後3年足らずで原文でシェイクスピアを演じたのである。全くもって困難な冒険的な企画であった。当時、新東宝映画社の社長をしていた父が米国の映画「JULIUS CAESAR」のフィルムを借り出して、新東宝本社の試写室で該当シーンを何回も写してくれた。この映画ではブルータスをジェイムス・メイスン、アントニーをマーロン・ブランドが演じていた。私達は彼らの演技を参考にして、本番に臨んだわけである。私は今年80才になり、心身ともに老化を感じる。心は物覚えが悪くなり、身は歩きが遅くなった。しかし、60年以上前のアントニーの台詞を思い出せるのは全く不思議である。

以下にその一部を記し、この駄文を終わります。

O, what a fall was there, my countrymen!  
Then I, and you, and all of us fell down,  
Whilst bloody treason flourish' d over us.  
O, now you weep; and I perceive, you feel  
The dint of pity: there are gracious drops.  
Kind souls, what, weep you when you but behold  
Our Caesar' s vesture wounded? Look you here,  
Here is himself, marr' d as you see, with traitors.

ああ、なんたる破滅の姿か、同胞諸君！  
今や、私が、そして諸君が、ともどもに打ち倒されたのだ、  
しかも、そのとき、凶悪無慙な反逆がわれらの頭上にわが世の春を謳っている。  
ああ、みな泣いているな、おれはよく解る、心中、惻隠の情を禁じえぬのであろう。  
まさに聖なる恵みの露と言うべきだ。心やさしきものたち、  
その涙はただシーザーの衣の傷跡を見ただけで流されると言うのか？  
それなら、これをみるがいい、これこそシーザーその人だ、  
暗殺者どもの手に裂りさいなまれたこの姿を。(福田恒存訳)

.....

**金田保男** 「-戦後の記憶-

私は昭和 18 年生まれで、もの心ついたときは北海道ニセコ町（以前の町名「狩太町」）に疎開しておりました。（出生地は東京都目黒区緑が丘で、この年に東京市と東京府が合併し東京都に名称変更）また姉に聞くと昭和 19 年に疎開したとのこと。従って戦争の記憶はありませんが、戦後の記憶は鮮明に覚えています。

**食糧難**

北海道には、当時水田は少なく（育たない）、主食はジャガイモ（馬鈴薯）で、トウモロコシのおにぎり、山菜（フキ等）の味噌汁、お米は、盆・正月のみ。それも外米と言われていましたが、粘り気のない米、その後に麦の配給が始まりました。内地米は、昭和 27 年頃から食べられるようになりました。この食糧事情により、山菜やジャガイモは今でも大好きで、これさえ食卓に上がれば他の豪華な食事には、目も触れません。ニシンとホッケ（魚）はよく食べました。

**「奉安殿」について**

私が小学校に入学したときには「奉安殿」（または奉置所）は無く、放送大学に学んでから教材に紹介があり、初めて知りました。私より 5 歳以上年齢の高い方に聞くと終戦まで存在し、脱帽・最敬礼してから校舎に向かったといえます。〔建造物の中に教育勅語謄本と御真影（写真）を収蔵〕「奉安殿」自体の写真は昭和 7 年狩太小学校に存在した写真を初めて見ました。

出典：ニセコ町 100 年史下巻 8 編教育より

**LARA 物資について (Licensed Agencies for Relief in Asia)**

私が 9 歳か 10 歳（小 2～小 3 年生頃）学校給食がありました。それは美味しく、皆喜んで頂きました。主に“脱脂粉乳”であったり、魚の缶詰が入った味噌汁です。その頃は意味も分からず皆おいしい、おいしいと言って食べておりましたが、それが判ったのは、放送大学の福祉関係の教材を見て理解できました。政治的な問題を孕んでいます、ともあれ日本の窮乏を見かねて援助を受け、私たちは栄養失調にならずに済みました。現在プラン・ジャパン」を通じて主として子女の教育支援やインフラの整備等の目的で途上国への援助を行っています。今度は私たちが恩返しと思っていますが、その支援は感染症の未然防止にもなり、廻り回って私たちの感染未然防止にも繋がっているものと思います。

.....

**永井藤樹** - 1 - 「戦前後の小学生の時の思い出」

私は子どもの時から、ぼんやりした子で戦争にかかわりの少ない田園地帯に住んでいたためか、日本が戦争をしている認識がありませんでした。それでも八月十五日が、まっ青な夏空で暑くて無風であり、生け垣の作る緑陰が強く、アブラゼミの声があたりを森閑とさせていたことは、なぜか覚えています。

昭和 20 年に小学校へ入学しました。4 月ですから、まだ戦争は終わっていません。入学して驚いたのは学校が兵舎になっていて、大勢の兵隊が白衣姿で、所在無げにうろついていることでした。どうも傷病兵のようです。戦闘帽をかぶっていたので兵隊と分かりました。水道を使うのも便所を

使用するのも兵隊が優先でした。私たちは兵隊が使わない日当たりの悪い倉庫から、不要品を運び出して教室として使いました。破れた窓ガラスは代用ガラスといって、ぼんやりと光を通す目の荒い布にニスのようなものを塗った代用品が張ってありました。古びた平屋の木造校舎は長さが50～60mあり、何か所も地震対策のつかい棒がしてあり教室は南側にあり、廊下は北側にあつて更にコンクリートの三和土があり、二棟の校舎の間は簀の子の渡り廊下で、屋根は付いていたので「ロの字」形をした典型的な学校建築で、職員室は東南の角の一番明るくて日当たりのよい場所にありました。

校門を入れてすぐ近くの職員室の前に「二宮金次郎」の石像があり、集合写真は必ずその前で撮影になりました。田舎の学校でしたが空襲警報が発令されると帰宅させられ、途中で遙か上空を飛ぶ飛行機を見ると茶畑に逃げ込みました。余った焼夷弾を捨てて行くから注意するように厳しく言われていたからです。学童疎開の子供たちは、お寺の本堂に雑魚寝をしていて、現在の避難所のような生活をしていました。農家に手伝いに出され、子守りや雑草取りなどをして、幾ばくかの食料を貰ってきました。都会っ子の彼らは野菜と雑草の区別もできず野菜を抜いて、農家の人に叱られていました。

戦争が終わり二学期に入ると、国語の教科書の文字を墨で塗りつぶしました。先生がどこからどこまでを塗るように指示します。私たちは訳も分からず、先生の指示通り塗りつぶしました。特に「さるかに合戦」などは全部塗りつぶした記憶です。三年生になって妹が入学してきました。しかし一学級しかないのに担任の教師がいないので、兄弟のいる者は弟・妹の勉強を教えました。でも、どうやって教えて良いか分からず、妹の方も理解できないようで本当に戸惑いました。

食糧が不足がちで妹は冬には、よくあかぎれや霜焼けになりました。手先や耳が赤く膨れる。かゆいので搔くと血を出し、治療法もなく摩擦すればいいというので手をこすり合わせたり、揉んでやったりしました。あかぎれの症状がひどくなると、手の甲に深い裂け目が幾筋も入り、血や膿がにじみ出てきます。免疫力が低下しているので、始終顔におできが出来て、いつも汚い顔をしていて見ている可哀相に思いましたが、どうしてやることもできません。戦争の悲惨さはこうして、いつも一番弱い者に現れます。今また、いつか来た道に戻ろうとしている気配を感じます。

.....

**永井藤樹** - 2 - 「京都へ原爆を投下せよ」

みなさんは 京都に原爆が投下されなかった理由を ご存知ですか。原爆どころか 京都は空襲にもあっていません。京都に原爆が投下されるなど 私には想像もつかないことだったので、そのようなことがあり得たという事実を知った時は、卒倒せんばかりに驚きました。京都がなくなれば、日本人の心の拠り所がなくなります。由緒ある神社仏閣や「京都御所」、歴史を留める京の町並みなど、すべてが焼き尽くされた京都を想像できるでしょうか。それはあり得べきもない光景です。そして又、原爆が投下されなかった理由は、京都をこよなく愛した一人のアメリカ人の存在が鍵になっていたことも 全く知りませんでした。

2012年8月、京都大学の付属牧場で行われた面接授業に参加しました。京都学習センターが計画した「わが国の牛肉生産を考える」というテーマの合宿授業です。 同僚三人と嵐山の脇を抜けて

から京都縦貫道を走り、兵庫県の丹波笹山に隣接した京都府船井郡京丹波町にその牧場があります。黒色和牛 150 頭ほどを飼育・研究している牧場です。牧場の広さは 16ha ありますから、一片 400m の正方形と同じ面積になります。

面接授業の内容は省略しますが、この授業で「牛肉生産」とは全く関係のない資料がなぜか配布されました。五百旗頭 真（いおきべ まこと）先生の『回避された京都への原爆』という A4 一ページ大の小論文です。五百旗頭先生は、有名は政治学者で防衛大学校長をなさっていた方です。放送大学でも「日本政治外交史」を担当されたことがありました。配布された資料は「時代の風」と題されたシリーズの寄稿文の一部と思われます。

五百旗頭先生は「歴史には、誰がやろうと結局はそうなるしかなかったと感じられることが少なからずあり、他方その時にこの人であったからこそ普通には考えられない事態になった、というケースもある」と言います。そして太平洋戦争末期の昭和 20 年の時、「もしヘンリー・スチムソンがアメリカの陸軍長官でなかったなら、京都への原爆投下は避けられなかったに違いない」と言います。アメリカは原爆を 2 発作りました。文官（元国務長官）であったスチムソン長官は原爆投下の責任者でした。この 2 発の原爆を効果的に投下するための攻撃目標委員会が次のような投下選定基準を作りました。

- 基準の第一は、直径 3 マイル以上の市街地をもつ大都市であること
- 第二は 一発の爆発で街の大部分が破壊され得る集中型都市であること
- 第三の要件は、8 月までに 空襲で破壊されていない都市であること というものでした。

検討結果、最有力候補地の AA とされたのが、京都と広島、次ぎの A ランクが横浜と小倉、そして B が新潟になりました。このうち まず新潟が外されました。工業地域も人口も 拡散的な都市であるという理由からです。

次に第三の要件から、横浜が外されました。横浜は 5 月 29 日の大空襲で市の主要部分が破壊されてしまったからです。これは候補地選定中であつたので、計らずも間一髪で避けられたことになります。そして第一候補地は、京都でなければならぬと結論がでました。京都は 86% が山に囲まれ爆発効果が最も大きい地形を持ち、京都駅を中心に 3 マイル以上の人口稠密地帯が続く百万都市です。しかも他の破壊された都市から、軍需工場と人口が移動・集中しつつあつたし、市の南部には師団司令部という爆撃を正当化できる軍事拠点もありました。つまり無差別爆撃ではないという口実ができます。また京都は日本の古都であり、日本人の「心のふるさと」であるので、その破壊は他の都市に比べようもない大きな衝撃を日本人に与える心理的効果があります。広島よりはるかに高い原爆投下候補地といえます。ところが目標委員会からこの結論を聞いたスチムソン長官は、即座に京都への投下を禁じました。スチムソン長官の主張は次のようなものでした。

「日本人が心のふるさとにしている京都への原爆攻撃は、戦後の日米関係の再建を困難にし、日本人がアメリカでなくソ連の懐に飛び込む戦略的損失を招く危険がある」というものでした。毎日何百人、何千人ものアメリカの青年が命を落としている現状を前にして一日も早く戦争を終らせ、若者を母親の元に帰すことが為政者には強く求められていました。原爆は戦争の早期終結のための有効な手段として開発されたのです。ポツダム会談に赴いていたトルーマン大統領に随行していたスチムソン長官は京都へ原爆を投下しないよう進言しました。大統領は即座にこれに同意しました。それはスチムソン長官への厚い信頼からでした。

ルーズベルト大統領の急死を受けて、急遽最高権力者になった若いトルーマンは、狡猾で強欲なスターリンとの連日の交渉で疲れ果てていました。穏やかで知恵ある長老であったスチムソンは、トルーマンにとって心癒される存在でした。こうして スチムソンは関係者に「京都への原爆投下禁止は 最高権力者の決定したところである」と打電したのです。このようにして 彼は京都を守りぬいたのでした。しかし、理由はそれだけであったのだろうか。その後の調べでスチムソン夫妻は17年前の1928年10月中国からの帰途、瀬戸内海の船旅を経て神戸港から京都へ入っています。そして京都の秋を楽しみ、旅日記に東山のふもとを歩きつつ 京都の文化と風景に 最上級の賞賛を語っているというのです。戦時にあって、感情を排した戦略論の言葉をもって敵国日本への配慮を貫き、個人が歴史の運命を変えた一例であったというのがこの論文のあらましでした。原爆は絶対に許されることではありませんが、京都への原爆投下が回避された裏には このようなエピソードがあったことを知りました。

こうして広島に最初の原爆が投下され、3日後に小倉へ向かったエノラゲイは厚い雲に遮られて投下地点を目視できなかった九州小倉を避け、長崎に向かったということです。京都に原爆が投下されていたら、小倉が雲に覆われていなかったら、長崎は原爆にあわなかっただろうし、横浜が空襲を受けていなかったら 原爆を投下されていたはずでした。

人にそれぞれの運命があるように、都市にもその都市固有の運命があると思うと、何とも複雑で感慨深い気持ちになります。

.....

**勝山悌治** 「戦争の記憶」

(1) 終戦の年の夏、本土空襲を受ける。

- ① 日本海側の県庁所在都市の中心部から約 10 km離れたところに我が家があり、空襲警報が鳴ると、庭に掘った防空壕の中に入った。しばらくすると、遠くからどンドンと音がするので、家族と飛び出してみると、お城など中心部に、B29 から焼夷弾が無数に落とされ、上空まで真っ赤になっていた。後で聞いた話では、これでたくさんの人が焼死し、また、城のお堀に入った人もみんな死んだそうです。
- ② 自宅は空爆を受けませんでした。アメリカの飛行機が飛んできてサイレンが鳴ると、電灯を覆い明かりが外に漏れないようにしてから、防空壕に逃げ込みました。それは2メートルほど地下を掘って、畳2畳ほどの広さに、屋根用に丸太棒を敷きつめて、土で覆い、入り口だけ少し開けて、入った後塞ぐ、湿っぽい空間でした。  
(現実には、よそで爆弾が落ちたところは、全滅だったと言われています)。

(2) 生活面(衣食住)の体験(家族からの話も含む)

- ① 食べ物は米粒がまばらなおかゆや、おかゆに芋をサイコロ状に切って入れたもの、さつまいも、じゃがいも、すいとん、イナゴの佃煮、芋のつるなども食べました。
- ② 着物も少なく、スフといわれる弱い人工の布や、ほころびにつぎをあてたりして、活用していました。
- ③ 鉄砲玉などに使うため、家の門柱や墓の柵、鍋、釜など金属の供出をさせられたとのことで

す。

(参考) 20 年余前、アメリカに行き、B29 の実物の展示を見る機会がありましたが、なんとその飛行機は前後（胴体の長さ）30m、幅（翼の長さ）40m、10 人乗り（8 人が機銃掃射可能）とその大きさにたいへん驚きました。

日本の戦闘機は小型で B29（爆撃機）とは単純比較はできませんが、日本とアメリカの力の差を感じました。また、原子爆弾（広島：リトルボーイ、長崎：ファトマン）の模型も展示されており、直径およそ 3 メートルの爆弾の破壊力大きさと悲惨さを思ったものです。

1937 年（昭和 12 年）日中戦争がはじまり、1941 年（16 年 12 月 8 日）米英との第 2 次世界大戦・太平洋戦争に突入、1945 年（昭和 20 年 8 月 15 日）に終戦となりました。実際に戦地に行った兵隊さんや日本にいても広島や長崎の原爆投下、全国の都市などへの空爆で死んだ人はおよそ 310 万人といわれております。

.....

## 大橋陽子

昭和 7 年、東京府、阿佐ヶ谷生まれです。

昭和 19 年夏、東京都練馬区立開進第三国民学校 6 年生として群馬県に集団疎開しました。疎開先では先生方も寮母さんも、皆ご親切でしたが、男の子は空腹に耐えかねて歯磨き粉を舐めたそうです。私は「武士は食わねど 高楊枝」と躰けられていました。6 年生だけ昭和 20 年 3 月 9 日に卒業と進学のために帰京し、その夜「東京大空襲」を経験しました。我が家は郊外にあったので焼けませんでしたが、家の前を東の方からゾロゾロと泣きながら歩いて来る人の列はいつまでも続きました。数日後に辛うじて卒業式は行われましたが、卒業証書はなく、下町の印刷所が 3 月 10 日に焼けたからだと後から知りました。私は栄養失調で全身の関節が化膿した状態で帰京しましたが、軍医だった父は当然のこととして日本中にお医者様がほとんどいっらなかつたので、母は 6 年生の娘をおぶって江古田の街中をお医者様を探して歩きまわりました。その年の東京都は中学校も女学校も無試験となりました。私と入れ違いに 2 年生の妹も磯部で集団疎開し、5 月には母が私に 4 歳の弟を託して伯父の住む小出に送り、自分は赤ん坊一緒に東京に残ったので、一家は四ヶ所に離散しました。

終戦の時は新潟県立小千谷高女 1 年生でした。全国の女学生がそうでしたがセーラー服は勿論、へちま襟の制服さえ機銃掃射のとき白は目立つからか着られなくなり、古い着物を解いて作り直した標準服とモンペ、下駄を履いて、トンネルを出ると顔中が真っ黒になる無蓋貨車に乗って登校していました。

終戦を迎えた日、私は詔勅があったことさえ知りませんでした。しかし、その夜から防火管制が解け、9 月になると田舎町にもアメリカ兵が進駐してきて、「チョコレート、チョコレート、リップナハタ」と言って日の丸の旗を欲しがりました。

戦後の食糧事情は更に、更に逼迫し、越後という米どころでしたが、私たちはネギの根、ナスのへたも食べました。サツマイモの茎や葉が加わればご馳走でした。

終戦の翌年の夏、母は着物を売って何がしかのお米に換えるべく、魚野川の堤に沿って昔の乳母

のところまで一緒に歩いていて、「このままお父様がお帰りにならなかったらどうしますか？」と聞かれて、13才の私は答えようがありませんでした。合歓の花が咲いていました。

しかし、幸いにも父は帰って来ました。登校の途中、長い橋の上で向うから歩いてきた軍服の人に「陽子か？」と声をかけられ、分かったのに私は恥ずかしくて黙って逃げ去りました。立ち止まってじっと見つめている父の視線を背中に感じながら。

.....

**高桑明子** 「暁に祈る」

ある老齢の男性が言いました。「NHKの朝ドラ、いいねえ、ほら古関裕而の」。懐かしい名前が出てきたので、「古関裕而の作曲した代表曲は？」と訊くと、彼は、「色々あるけど、僕は、暁に祈るが好きだな」。「暁に祈る」というのは、戦後ソ連の収容所で、食料不足と重労働で、日本人収容者同士が、食料確保のため、仲間の衣類を剥ぎ、外にほおり出し、極寒の外で、その人たちは暁に手を合わせ、「天皇陛下万歳」と叫んで、祈りの姿のまま凍っていったとか。と、言う意味ですよ、と、私が話すと、男性は驚いて、「それとは違うね。」と言って歌い出しました。

「あーあー、あの顔で、あの声で、手柄頼むと、妻や子が.....」

70歳はとうに越した人たちも数人いたのですが、こもごもその歌なら知っていると言っていました。私も、懐かしく一緒に歌っていました。

この世と隔絶したような亡霊のような、男性が現れたのは、確か昭和34年ころでした。ソ連の収容所から、やっと帰ってきたけれど、日本は好景気に沸いていましたが、彼には職がなく、元上官であった父に良い就職口を紹介してくれ、との訪問でした。その頃、日本は朝鮮特需を経て、高度成長期に入っており、戦争はもうすっかり過去のものとなっていました。しかし、彼の言葉、態度の端々に、未だに軍服をまとい、今の世に馴染めない、異質のものを感しました。小さな社宅での父と彼との話は、小声でしたが、漏れ聞こえてきました。彼は、「収容所では暁に祈るもありました」と言っていました。

「暁に祈る」なんて、素敵な言葉ですが、「も、あった」とは、どのような意味でしょう。男性が、私には、奇妙に見えた。最敬礼をして、立ち去った後、父に聞いてみました。躊躇しながら、父は彼との話を語ってくれました。ソ連収容所における食糧不足と重労働の日本人捕虜の悲惨な話を。それが、上記のような話でした。軍歌の霸王と言われていた、古関裕而の「暁に祈る」の歌。ご存知ですか？懐かしく、そして、何とも悲しい歌です。

作詞 野村俊夫 作曲 古関裕而

- |   |   |   |  |
|---|---|---|--|
| 1 | ああ、あの顔であの声で<br>さらば祖国よ、栄えあれ<br>遥かに拝む宮城の<br>空に誓ったこの決意 | 2 | ああ、堂々の輸送船<br>手柄頼むと妻や子が<br>千切れるほどに振った旗<br>遠い雲間に、また浮かぶ |
| 3 | ああ、傷ついたこの馬と   | 4 | ああ、あの山もこの川も  |

飲まず食わずの日も三日  
捧げた命これまでと  
月の光で走り書き

赤い忠義の血がにじむ  
故国まで届け暁に  
あげる興亜のこの凱歌

その歌が、「暁に祈る」と言う歌とは知らず、物心もつかない頃、私は歌っていました。

.....

**安達美帆子** 「台湾で育った母の戦争体験」

私は戦後の生まれで戦争の体験はありません。しかし戦争前後のことについては、母からよく聞いていました。

母は終戦まで、当時日本の統治下にあった台湾で生活していました。私が小さかった頃、母はよく自分の育った台湾についての話をしてくれました。祖父である母の父は日本の企業の台湾支店に長く勤務し、日本と台湾の物流に携わっていました。台湾の人は暖かくおおらかで優しく、母は台湾が好きだったそうです。朝には台湾の朝食である油炸粿（揚げパン）を売る「ユウチアコ～エ～」という物売りの声が聞こえ、繁華街の屋台にはおいしそうなお料理が並んでいました。母は祖父から屋台で食べることは禁止されていて食べたことは無く、それが残念だったそうです。台湾は冬でも温暖で、ほとんどの家の庭には果樹が植えてあり、南国のおいしい果物を一年中食べることができました。台湾では食が大事にされ、「ジャッパーパーボエ？（食事はしましたか？）」が「こんにちは」という挨拶の言葉だそうです。

母が高等女学校を卒業して暫く経った頃、戦争が始まりました。伯父達も兵隊に行き、町には男の人の姿が少なくなりました。人手不足の穴を埋めるべく、これまで働いたことのない女性達も仕事に就くようにと軍からの要請があり、母も銀行で働き始めました。祖父が「もっと早くに結婚相手を探すつもりだったのに、男の人達は兵隊にとられていなくなってしまった」「うちの娘は職業婦人になってしまった」と言って嘆いたそうです。

戦時中、台湾にも空襲はありました。母の家でも防空壕を庭に掘り、空襲警報が鳴ると中に入りました。台湾の空襲では日本人の死者も出たそうですが、母の家のあった地区は無事でした。一度、空襲警報が鳴ってすぐに米軍機が飛来し、慌てて防空壕に入ったものの、飼っていた犬を入れる時間がなく、動いているものを狙っての機銃掃射の音が聞こえてきて生きた心地がしなかったそうです。空襲警報解除後に外に出てみると、幸い犬は植木の陰で震えていて無事でした。台湾では地上戦はなく、食料も大きく不足することがなく、皆で戦争を乗り切っていこうという助け合いの気持ちもあって、戦時中は大変だったけれど嫌な思いをしたことはないと言っていました。

やがて終戦となり、母達日本人は日本に引き揚げることになりました。母は長く暮らした台湾を離れて内地（日本本土）に引き揚げるのは嫌だったそうですが、もはや台湾は日本の統治下にはないため、残ることはできませんでした。終戦から引き揚げまで、母の周囲では台湾の人たちとのトラブルは無かったそうです。ただ大陸から中華民国の兵隊が上陸してきていたため、日本人は出来るだけ外に出ない方が良くと言われて家の中で過ごしていました。引き揚げの前にお別れに来てくれた台湾の人が、「この前まで私たちは日本人と言われていたのに、今度はいきなり中華民国の国民

と言われるようになった。でも私達台湾人と外省人（大陸から来た人達）は言葉も風習も違うから、同じ国民と言われてもね」と言っていたのが忘れられないそうです。

台湾から引き揚げた日本人は約 48 万人とのことです。引き揚げ時には、いくらのお金と身の回りのものは持ち帰ることが出来ました。それでも台湾で使っていた物は、ほとんど置いて来るしかありませんでした。母は、引き揚げ後しばらくの間、台湾の生活や大切にしていた物を思い出して切なかったそうです。

帰国後には食糧難や満杯の汽車での移動、戦争ですさんだ人々の心など、嫌なことがたくさんあったと言っていました。でも、そういうことはあまり語りたがりませんでした。

母は、私たち子どもには台湾の話をよくしてくれましたが、他の人にはあまり話すことはありませんでした。話をしても内地の人にはあまり理解してもらえず、「引き揚げ者」という言葉だけで下に見られたことも何度もあったそうです。

戦後 40 年ほど経った頃、母は父と共に台湾に旅行に行きました。台湾で住んでいた家はもうありませんでしたが、通っていた高等女学校はまだあってそのまま学校として使われていました。案内してくれた人にかつての卒業生という話をすると、「この学校の先輩なのですね」と喜んでくれたそうです。他の事務の人達も一緒に、校内をくまなく案内してくれたと嬉しそうに言っていました。台湾にもう一度行きたいと言いつづけていた母も、あの旅行でようやく落ち着いたようでした。

.....

## 伊藤洋子

私の父母は戦争の話をほとんどしませんでした。記憶が生々しくて話せなかったのかもしれないと今は思います。（私が育ったのは高度経済成長期で、戦争の話が歓迎される時代でもありませんでしたが。）父は昭和 6 年生まれ。幼い頃に祖父の仕事で中国の大連に渡り、その後、天津、北京で暮らしたそうです。その間一度も日本に戻らずに北京で終戦を迎えました。1972 年に日中国交正常化されると、父は中国に自分が育った家を探しに出かけました。残念ながら北京の家は探すことがかなわなかったけれど、天津の家は洋裁学校になっていて当時のそのままの姿で残っていたそうです。その後、私も天津を旅した時、石造りの街並みや広い広い空とはるかに続く中国大陸を見渡して、ここが父のふるさとなのだろうかと思涙があふれました。

先日、黒い雨訴訟のニュースが報道されていました。戦後 75 年間も自国民に原爆被害を認めないという残酷な仕打ちに驚きと憤り、怒りと悲しみを感じています。今、テロが戦争を変えたとも言われているようです。私たちの想像を絶する残虐なテロ。そのような恐ろしい時代に平和を守るために、「戦争の記憶」の掲載を賛同・支持しています。

この意義ある試みに導かれるように、この秋に、鹿児島県知覧特攻平和会館を訪ねてきました。パンフレットの一文を引用させていただきます。

「世界恒久平和を願いながら」

この知覧特攻平和会館は、第二次世界大戦末期の沖縄戦で、特攻という人類史上類のない、爆装した飛行機もろとも敵艦に体当たり攻撃をした陸軍特別攻撃隊員の遺影、遺品、記録等、貴重な資料を収集・保存・展示して、当時の真情を後世に正しく伝え、世界恒久の平和に寄与するものです。

私達は、特攻隊員や各地の戦場で戦死された多くの特攻隊員のご遺徳を静かに回顧しながら、戦闘機に爆弾を装着し、敵の艦隊に体当たりをするなどという命の尊さ・尊厳を無視した戦法を絶対にとってはいらない、また、このような悲劇を生み出す戦争も二度と起こしてはいらないという情念で、貴重な遺品や資料をご遺族の方々のご理解ご協力と関係者の方々のご尽力により展示しています。

特攻隊員達が二度と帰ることのない「必死」の出撃に臨んで念じたことは、再びこの国に平和と繁栄が甦ることであつたらうと思います。知覧が特攻隊の出撃基地であつたことから、沖縄戦の特攻作戦で戦死された隊員 1,036 名の当時の真の姿・遺品・記録を後世に残し、この史実を多くの方に知っていただき、特攻をとおして戦争のむなしさ、平和のありがたさ、命の尊さを訴え、後世に正しく語り継ぎ、恒久の平和を祈念することが基地のあつた知覧の住民の責務であらうと、特攻基地跡の一角に知覧特攻平和会館を建設しました。

.....

**澤村雅嗣** 「戦争の記憶」

終戦の時、私は国民小学校 1 年生でした。私の戦争についての最早期記憶は、4 歳の頃、家の玄関の土間につくられた防空壕についてです。私の生家は東京浅草の外れにありました。空襲警報が発令されるたびに、防空頭巾をかぶって、防空壕に飛び込みました。家の前には、防火用水が設置され、向こう三軒両隣で、防火訓練が行われていました。夜間、B29 が来襲すると、夜空にサーチライトが照射され、B29 を交差に捉えると、高射砲が発射されました。

昭和 19 年の初め頃のことですが、家の近くの「春日通り」に面した「旗や」に爆弾が投下されました。家人は亡くなりました。私の家は 70-80m 離れておりましたが、窓ガラスは割れ、家の前に、旗竿の先に着ける金色の玉が飛んできておりました。防空壕は爆風を避けるには効果がありますが、焼夷弾には全く無力で、昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲の折、家の近くにあった「新堀小学校」の大防空壕には、多くの人が非難しましたが、ほとんどの人が煙にまかれて、窒息死しています。

空襲が激化してきた昭和 19 年中頃、姉は集団学童疎開しました。残る家族も、徴用（国家権力により国民を強制的に動員し、一定の業務に従事させる）された父一人を浅草の家に残して、父の実家である埼玉県本庄市郊外の農村に疎開しました。

昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲で、東京下町はほとんど焼失し、一面焼け野原となりました。勿論、私の浅草の家も焼失し、父は上野の山に逃れ、命は助かりました。父の姉一家は浅草千束町でミシン業を商っていました。東京大空襲の時、主人と次女が家にいて、上野の山の方面に避難しました。ところが、たまたま途中の龍泉寺で、同業の父の弟と出会い、「義兄さん、手荷物が少ないね」と言われ、再度、家に引き返しました。そしてミシンの付属品を持って、また、上野の山を目指したようですが、既に火の手に遮られ、反対の方向の吉原、隅田川方面に逃げたようです。

二人の行方が判らず、上野の山で、龍泉寺の弟から事情を聞いた父が、数日間、焼け跡を探し回りました。辺り一面、死体がごろごろしており、それを軍隊がトラックに積んでどこかに運び去りました。父が数日間探し回った結果、吉原の池のほとりに、義兄の物と思われるミシンの付属品が入っているバッグを発見したが、遺体は探し出すことが出来なかったと。以上は生前、父から聞いた話です。

私は疎開先の農村で、終戦の年の昭和 20 年 4 月、国立国民小学校に入学しました。疎開先の群馬県以上に「八丁八反」と呼ばれていた飛行場があり、米軍機がそこを目指してよく飛来してきました。その都度、空襲警報が発令され、授業は中断され、家に帰されました。一度、帰宅途中、米戦闘機が飛来してきたので、道路わきの畑に身を隠すと、パタパタと低空で機銃掃射されたことがあります。

8 月 15 日、終戦の日は、晴れて暑い日でした。家の前にある字の会館の前に、多くの村人が集まり、天皇の終戦の詔勅を聞きました。村人たちが、玉音放送を聞きながら、涙を流していたのを覚えています。

.....

**中島悦子** 「私の戦争体験」

母に背負われて頭から夏掛け布団をかぶっていた私の最初の記憶は、一生懸命に駆けている母の吐息が聞こえたからでした。母は小柄でしたので痩せていた幼児とは言え背負って走るのは大変だったと思います。「あっ、いつもの道」と気が付いた時、道に沿って流れている川の向こう岸の牛乳屋さんの屋根に焼夷弾が落ちました。火の玉のような爆弾によって一瞬周りがパッと明るくなりました。4 枚あるガラス戸にかかっている白いカーテンが見えました。ヒューという音もしたように思います。屋根にあたったとたんにドーンという爆発音がしましたが、なぜか眼はそむけませんでした。母は道の反対側によけつつ走り続けました。途中で木の柵に太い針金で縛ってある広い空き地も通りました。他にも多くの人が同じ方向に向かって走っていて道は混雑しており、人の声がわーわーと聞こえました。

次に思い出すのは、母が土手の草をつかみながら、坂の上に登って行った場面です。登りつめてやっと母は休み、私も安心したせいか、そこでいったん記憶が途切れています。そこは富士森公園でした。今調べてみますと平地の様ですが、確かに坂を登ったのです。父も一緒に逃げたのですが、小型ラジオを右手にザックを肩にかけ、母に「早く、早く」というばかりでした。そこで夜を過ごしたと思います。翌朝、家に戻ってみると周りに煙突以外高い建物は全くなく、本当の焼け野原になってずっと遠くまで見通すことができました。焼け跡の匂いが充満していました。庭に水をいっぱい張ったお釜の水はきれいになっていました。その裏にある防空壕に避難していたら多分命はなかったでしょう。

私達一家は東京の杉並区に住んでいましたが、私だけ葉山の母の実家に疎開していました。葉山では海から艦砲射撃の音がはっきりなしに聞こえ、その音は止むことはありませんでした。その後、どうせ助からないのであれば 3 人一緒の方がと、八王子の父の親戚に疎開したのです。そして終戦の約 2 週間前 8 月 2 日に八王子が大空襲にあったのです。

真偽のほどはわかりませんが、米軍は市民の大半が集まった富士森公園は爆撃をしなかったと聞きました。また、織物工場が多かった八王子でも日本人が経営している工場をピンポイントで爆撃したとのことでしたが、結局類焼等で焼野原になってしまいました。幼かった私は八王子の空襲よりも葉山の艦砲射撃の音の方が怖いと感じたのは、母がそばにいなかったことと関係があるのでしょうか。しかし、八王子の空襲で牛乳の焼ける匂い、焼け跡のなんとも言えない雑多な匂いは今でも鮮明に覚えており、私の戦争体験の原点と言えるかもしれません。それと母に背負われた時にかぶっていた夏掛けの鮮やかなブルーの色と模様は今でもはっきりと覚えています。それは私の心の中での恐怖が覚えさせているのかもしれません。

.....

**寺村紀美夫** 「戦争の記憶」

1、生地 of 記憶

私の生地は四谷区（現新宿区）荒木町であった。荒木町は坂道が多く、幼児の頃は三輪車で坂道を下って遊んだ記憶がある。荒木町は花街で、生家の前は大きな料亭で「奈る駒」となっていて、母親は髪結いを生業としていたので芸者衆が出入りして華やかであったと記憶している。荒木町からは近くに大本営があり、そこから将校が馬に乗って「奈る駒」に入っていくのを記憶している。戦争中でも将校は芸者遊びしていたのでは？

2、山の手大空襲の記憶

1945年（S20年）5月25日夜、米軍の大空襲で新宿、渋谷、池袋等の山の手一体が燃えて地獄絵図と化した。この大空襲で我々一家は目の前の料亭「奈る駒」の大きな防空壕に入り命拾いした。翌日母と妹の三人で徒歩で信濃町駅へ行った。その途中で焼け焦げの遺体がゴロゴロあるのを見て恐怖を感じた。消防車も丸焦げで消火に役立っていなかったのではないかと思われた。信濃町駅から省線（今のJR）で池袋駅へ、そこから東武東上線で埼玉県内の男衾（おぶすま）駅へ行き、父親がほんの一部の家具を預けていた商家にたどり着き、そこで一時暮らすことになった。父が学童疎開していた兄2人を引き取り疎開先に帰ってきた。その年8月15日（終戦日）の早朝、男衾の近くの熊谷市は米軍に空襲され、空に黒い煙が見えたのが記憶にある。

3、疎開先（ひもじさやいじめ）の記憶

男衾の商家は間もなく追い出され、親戚のある隣村の八和田村（現小川町に合併）のお寺に潜り込み、疎開生活をした。親戚からの支援はほとんどなく、毎日の生活は食べ物がなく、近所の農家から家畜用サツマイモやトウナス（カボチャ）を貰い食したが、ひもじい毎日は変わらず、栄養失調でやせ細った。このひもじい生活は小学校、中学校まで続いた。そして村内で何回か引っ越したが、近所の子供達からのいじめにもあった。疎開生活ではよい思い出はなかった。

.....

**石橋正彦**

終戦時私は5歳半で、実際の体験を記憶している最後の年代かもしれません。私は東京の阿佐ヶ谷に生まれ、終戦時もそこに住んでいました。省線（今の中央線）の線路近くに住んでいたのも、皇族が多摩御陵に行く際には、線路端の住民は洗濯物をしまう様に命令され、整列させられ、最敬礼でお召列車を送るとというのが常でした。戦局が不利になると、線路端の家々は路線を守るために強制移転。そして軍隊が来て強制取り壊し。もちろん重機などはないので、太い縄をかけて引き倒すのです。家を取り壊した後は畑になっていましたが、ある日空襲の後に焼きネギが沢山出来ていたことを覚えています。

空襲が激しくなると、日中でも、「警戒警報発令！」「空襲警報発令！」と大声で叫ぶ声が聞こえ、私達は大急ぎで庭に掘った防空壕に駆け込んで抱き合って震えていたものでした。空襲は本当に怖かったです。夜は探照灯が夜空を照らし、B29が沢山飛んできて、それに対して高射砲を打ち上げるのですが、全然当たりませんでした。B29から沢山落とされる焼夷弾が光り輝くように見え、やがて近くの住宅が炎上し、焼け出された人達が右往左往している、といった光景が当たり前でした。阿佐ヶ谷付近はとくに省線を狙って攻撃されたようで、駅周辺は焼け野原になりましたが、わが家は強制移転のお陰で線路端にいなかった為か、幸いにも焼け出されませんでした。阿佐ヶ谷駅周辺の焼け野原には終戦の後すぐにバラック造りの闇市が出来、またそこからすぐに火事が出てまた焼け野原になったことも淡い思い出です。

防空壕の中でセミの幼虫を捕まえ、洗面器に入れて観察していたら、翌朝羽化したのですが、その水色の翅の美しかったこと。防空壕の中で焼夷弾の空襲におびえながら見たセミの羽化。今でもアブラゼミの抜け殻を見るたびにその時のことを思い出します。家の前にはコンクリート製の防水桶がどの家にもあったようですが、そこには沢山のボウフラ。放送大学の先輩のこうの史代さんのアニメ映画の「この広い世界の片隅に」を見ていると、一升瓶に米を入れ、棒で突いていた光景が出てきましたが、そうやって精米していた、これも懐かしい光景です。

先日NHKの「#あちこちのすずさん」という番組を見ていて、その中で、戦時中焼夷弾が沢山落とされ、不発弾も少なくなかったのも、不発弾を拾って分解し、風呂焚きの燃料として使った、という投稿がありました。投稿者はたまたま風呂焚きを問題なく出来たので、投稿出来たわけですが、おそらく不発弾を拾った人の中には爆発して風呂焚きどころではなかった人もいたのではないのでしょうか。以前私がミクロネシア連邦のポナペ島に行った際、島の長老に連れられて島内を歩いていた時に40cm位の砲弾を見つけて珍しいので手に取ったのです。すると、その長老はびっくりして、「危ない！」と言って、すぐにそっと置くように言ってくれました。信管が付いていたのです。扱い方を誤れば、爆発する危険があったのです。知らないとは言え、なんとも恐ろしいことでした。島のあちこちにまだそのような旧日本軍の戦争の跡が今でも残っており、私達日本人は平安に暮らしている時に現地ではまだ子どもなどが危険にさらされることもあるのです。昔の日本人小学校の跡地には「奉安殿」の残骸が残っていました。砲弾などではなくても、高射砲陣地の跡やトーチカの跡など太平洋諸島の島々を含む、かつて日本が迷惑をかけた国々・地域には今なお”戦争”が残っていることを私達は忘れてはならないと思わされたことでした。

南方派遣の途上、台湾沖で米潜水艦に撃沈され、叔父が亡くなりましたが、おそらく多くの家族に戦死者、戦病死者がいたのではないのでしょうか。今の平和の陰に大きな犠牲があったことを知って欲しいと思います。